



日本記者クラブ 記者会見

ペレストロイカの本質と日ソの新しい対話

アレクサンドル・N・ヤコブレフ
ソ連共産党政治局員兼書記

1989年11月15日

主演・ゴルバチョフ、グラントデザイン・ヤコブレフといわれるに
ふさわしく、ペレストロイカの哲学・理念の本質を語っている。

ペレストロイカのプロセスが、社会主義の破綻でも、ソ連の政策破
綻でもなく「目下、進行中のことは社会主義の勝利である」と述べた
ヤコブレフ氏は、ソ連邦崩壊(1991. 12. 21)をどう受けとめたのだろうか。

© 日本記者クラブ

日本記者クラブでお話をする機会を得ましたことに対して、皆さま方に心からお礼を申しあげたいと思います。この機会を利用して、日本においてまた全世界において関心と呼ぶところのいくつかの問題について、若干お話をさせていただきたいと思います。

まず、ペレストロイカについてです。この席において、ペレストロイカの発展について、何か新しいことを皆さまに披露することは大変に困難です。すでに皆さまの報道によって、かなり広範にまた全体的には客観的な情報が伝播されているからです。ただ時としては、少しものごとをドラマチックに描いている部分もなきにしもあらずですが、それはプレスにとっては災難でもなければ、またジャーナリストである皆さまの罪でもありません。

生命力失った 30 年代の社会主義モデル

同じようなことは、私たちの国のマスコミの中にも見られます。ソビエトのジャーナリストは、いま容赦なくわが国の改善のために、いわゆる外科医の機能を果たしております。必ずしも常に私たちの国の新聞などのマスメディアにおいて、権威ある情報やバランスの取れた情報ばかりが流されているわけではありませんが、全般的に申しあげて、マスコミは長く続いてきた停滞の冬にたまった泡を、表面に浮上させるような活動をしています。

ペレストロイカはいわば社会的な偉大な実験でして、今日の時点ではまだその結果のすべてを予測することはできません。この刷新のプロセスは、当初想定された限界よりも、その枠を遠く超えて進行しています。このプロセスは、様々な傾向を持つ政治的な勢力の活性化をもたらしています。“様々な傾向を持つ政治的な勢力”には、左側のもの、保守的なもの、より穏健なもの、そしてまた最もラジカルなものも含まれています。

どのような複雑な条件が、わが国に形成されてきたのか。このことを言い当てるためには、決して明せきなる政治家である必要はありません。私たちは、ペレストロイカを開始するに当たり、意識的に困難な試練に向けて歩を進めました。なぜならば、このほかの出

口というものはなかったからです。

30 年代の社会主義のモデルは、今日、全く生命力を失ってしまい、それに代わるものが必要とされています。かつてこのモデルによってもたらされた様々な誤謬や歪曲が蓄積され、しかもそれらがタイムリーに是正されなかったため、さらに広がり、堆積を重ねてまいりました。

もちろん、ペレストロイカのプロセスの中で、その条件下で出てきた誤算とか、あるいは困難も存在します。しかし、それらは深淵なる社会的な変革の過程では、当然のものであるというふうに、私たちは受けとめています。党・国家の新しい指導部は、大変に複雑な、そしてドラマチックな道を選択しました。それは政治的な、そして経済的な変革を抜本的に実施するという道であります。なぜドラマチックなのか、という質問が出るかもしれません。それは、いままでに蓄積された惰性とか保守主義とか、あるいはまた社会意識の中に形成された古いステレオタイプなどの規模が膨大であるからです。大衆に理解されない危険性があるがために、そしてまた新しいものをすべて死活的な脅威と受けとめる官僚機構の抵抗の危険性があるがために、私たちはドラマチックな道を選んだのです。

いま、私たちは転換期の困難を体験しています。しかし、それが袋小路ではない、ということを理解する必要があります。このことを、わが国の社会もよく理解しておく必要があります。民主的な変革が正しく発展していくためにも、またその道はずさないためにも、わが国の社会は、そのことを知っておくべきであります。この点は、わが国の社会のみならず、世界全体が知っておく必要があると、私たちは考えています。なぜならいまや人類の運命は一体不可分であるからです。

根づき始めた複数主義の原理

ソビエト連邦は、よりオープンな社会と化してきております。私たちは自分たちの問題を隠そうとは思いません。そういう問題をオープンにし、全人民的なものにし、全世界的なものとして公開することによって、自分たちを鍛えることができ、精神を浄化すること

ができ、また新しい確信を得ることができる、と信じるからであります。私たちは、困難な問題に対する既成の答えではない、新しい回答を模索しています。1人よがりでの独断的な管理運営が、今日では対話の運営と化してきております。

まさにロシアの社会主義の一番最初のテーゼの中に、いま申しあげたようなことが含まれているわけです。「ソビエト」という言葉は、「ソビエト政権」という言葉はすなわち「対話」を意味しております。様々な意見の闘争を意味しておりますし、また、平等な立場での論争を意味しております。まさに、そのような条件の中でもってはいじめて、真実というものは描かれるわけであります。

このようなプルーラリズム（複数主義）の公式が権力機構の中に徐々に形成され、根づこうとしています。このような形で民主的で真に社会主義的なモデルが形成されてきつつあるわけです。

ペレストロイカの本質は、社会的、民族的平等の実現方法についての図式的で単純化されたユートピア的な認識の危機を、ただ単に公的に確認することではありません。ペレストロイカの本質は、変革のための土台であり、出発点であります。ペレストロイカから出発して、いま進行中のプロセスは、真の人間の自由へと、また社会的な関係への人道的なあり方へと、そしてまた全人類的な道徳性の勝利へと導かれるものであります。

あらゆる権力の勝手気ままに対して、それを許さない保証というものは、民主主義以外にはあり得ない。そのことを、私たちは今日理解しております。それがまず重要な一点目ですけれども、それですべてが終わるわけではありません。

人間の理性的な利益に導かれた健全な経済関係に依拠してはじめて民主主義は意味を持ちます。簡単に言いますと、行政指令的な手段および管理システムを破壊する必要があるということです。自分の労働の成果や結果というものと全く関係のない、しかも社会的にはもうすでに命を終えたような類の支払い・報酬システムや、経済運営の無責任さを打破していく必要があります。これが重要な二点目です。それから、いわゆる悪平等と“いささか根性”をすべて除去する必要性もあ

ります。自由な市場および完全な商品と貨幣関係の承認。様々な所有形態の平等なる存在とそれらの間での競争。個人的なイニシアチブと企業心を活性化させることが大切です。

政治におけるペレストロイカは、法治国家の創設を意味します。社会的な、国家的な機関および組織の機能を明確に分化すること。すなわち立法府、行政府、司法府の機能を明確に分化すること、そして様々な形態の自治を最大限に発展させる、ということにそれは向けられています。

時代の挑戦に対する社会主義的回答

社会的な分野におけるペレストロイカというのは、社会発展の民主的なモデルを確立させることです。かつて私たちは、初めて実生活において広範な社会保障を導入しました。けれども、これらが“いささか根性”を生み出す要因になる、というような危険性を、おそらく見過ごしていたのでありましょう。長い間、基本的にはすべての問題を解決した、と考えられていました。社会的な権利の抑圧状態とか、あるいは法的に人々が保護されていない状態が存在するということに気づかなかったのです。

私たちが、社会主義に関する学問を、宗教、あるいは信仰に変えてしまった時に、他の人々はこの学説を私たち以上にうまく利用しました。私個人としては次のような印象を持っています。すなわち、西側の企業家たちは、マルクスの資本主義に対する分析を、わが国の経済学者以上に慎重に勉強したと言えます。私たちは、この学説を神聖視しましたが、資本家たちはこれを教科書としました。当然ですが、革命が普及、伝播することを恐れた資本家たちは、勤労者に対して少なからぬ社会のおよび法的な譲歩を行いました。というわけでして、このペレストロイカというものは、時代の挑戦に対する、私たちの社会主義的な答えのバリエーションとして出てきたわけです。

ペレストロイカは、わが社会主義がすでに枯れきってしまった死せる幹であり、新しい芽を出すことのできない幹であり、体制であり、自らの創造的なポテンシャルを全くなく

した体制である、と考えた人々にとっては、それは大変思いがけないものでありました。

私たちの見るところでは、世界の多くの人たちは、私たちの新しい思考への呼びかけ、新しい身の振舞い方への呼びかけを、誠心誠意歓迎して受けとめております。私の考えでは、ペレストロイカは決してソ連邦の国内的な出来事であるというものではなくて、まさにユニバーサルな、総合的な、全世界的な意味を持つものであると考えます。

私たちは、いまやみんな一緒になって初めて、核の脅威を除去する問題、あるいはエコロジーの問題を解決することができます。私たちは全地球的に共同して初めて、この地球の持つ資源の合理的な利用および自然資源の保護、擁護が可能であろうと考えます。また、数千年にわたって続いてきた暴力の文化というものを、人類は一緒になって初めて除去することができますと思います。世界発展、あるいは人類の発展の中で、人々の平等や社会正義を達成するためには、私たちがみんな一緒に協力して発展をめざすという道しか残されていません。衝突や対決の姿勢では、いまや社会発展を得ることはできません。矛盾は進歩の原動力であり、矛盾とは行動と相互理解を呼びかける要因でなければなりません。対外政策における私たちの新しいアプローチの出発点は、まさにそのような哲学に由来しているものです。

いま、私たちは分水嶺に向かって歩んでいます。20世紀から21世紀への境界線へ近づいています。21世紀へ向けての最後の10年が到来しつつあります。この20世紀は最も創造的なものが現れた時代でもあり、同時に最も人類史上大きな悲劇がもたらされた世紀でもあります。

そこで、私たちはある大きな問題に直面しています。21世紀は新しい時代の輝かしい到来であるのか。あるいは、20世紀はホモサピエンスの栄えある歴史の最後の終章となるのか。この問題に対して答える際に、私たちは理性に依拠するほかはありません。人類の文明が今後いちじるしく開花するかどうかは、私たち全員の創造的な共同努力いかんによります。その道しかありません。

日ソ関係も独白から対話へ移行

ところで、当然のことですけれども、皆さまは日ソ関係に関する、私たちの見方や評価に関心がおありのことと思います。

まず最初に強調すべき点は、ソビエト連邦に住む者は、すべて隣人、隣国と善隣的でオープンな関係が必要であるという認識を持っているという点です。わが国の対外政策においては、すべての方向、すなわちヨーロッパ方向、アジア方向、太平洋方向、アメリカ方向、こういういろいろな方向がありますけれども、これらの方向はすべて平等であると考えられています。

これまでに形成されたソ日関係を性格づけてみますと、次のように言えると思います。すなわち、肯定的な面が徐々に蓄積されつつある。政治的な対話が活発化してきている。すでにこの関係は2つの個別な独白ではなくて、対話となってきている。本質的にこの対話は内容のあるものとなってきており、新しい発展へ向けてのものであると言えます。貿易、経済、科学技術的な関係が発展してきています。文化的、人文的な分野での交流の進展もみられます。私たちは、このすべての傾向が今後一層発展することに賛成です。ソ連と日本との関係が、真の善隣関係を基盤として、多面的で内容豊かなものとなるように願っています。ソ日関係のレベルが、世界における両国国民の位置および役割にふさわしいレベルに合致するように、希望しております。

平和条約締結への道を、忍耐強く一貫して進めていく必要があると思います。今後一層のソ日関係の深化を基盤とし、かつまたこのソ日関係の規模および質をあらゆる分野において増大させることによって、それは達成可能だと考えます。

私たちは、1991年に予定されているソ連邦最高会議議長ゴルバチョフ氏の訪日に、大変大きな特別の意義を見出しております。ソ日の首脳会議は、ソ日関係の発展にとって新しいインパクトをもたらすであろう、と確信しています。同じような思考や希求が、日本の側にもあってほしいものです。なぜなら東洋で言われるように、「拍手を打つためには片一方の手のひらでは不可能である」からです。

さて、この後は皆さまの質問にお答えした

いと思います。ところで、質問は2番目のものから始めてかまわないと思います。というのは、1番目の質問については、私はすでによく承知しておりますし（笑）、しかも、もう何度も答えてまいりましたので、どうか2番目からお願いしたいと思います。

質疑応答

平野裕（毎日） ゴルバチョフソ連最高会議議長の訪日問題と、天皇の訪ソの問題、この2つを質問します。9月にシェワルナゼ外相は中山外相に対して、91年にゴルバチョフ議長が初訪日すると伝えました。非常に早い訪日日程の発表を大変意外に思ったわけです。おそらくソ連は努力目標として、この日程をあげたのだらうと思ったのですが、ヤコブレフさんの来日によって、事情が少し変わったんだらうと思います。ヤコブレフさんは、日本の代表的な政治家の方々と質量ともに豊富な会談をされて、帰ってそれを報告するだらう。それによってゴルバチョフさんの訪日日程は具体的に決まるだらうと思うんです。

そこで、ヤコブレフさんの訪日による成果、すなわちゴルバチョフさんの訪日についてどういう確信を持たれたか、いつ頃になるであらうか。この訪日のための条件整備はどういうものであるのか。具体的にお話いただきたい。また天皇をソ連へ招待されたそうですが、いつ頃を考えているのか。天皇を招待される目的はどのようなものであるかもうかがいたい。

ヤコブレフ それがたった2つの質問ですか。（笑）

ミハイル・セルゲビッチ・ゴルバチョフの訪日の可能性は現実的なものであると考えます。両国政府間では、この訪日の時期に関しては、まだ具体的には討議されておられません。つまり、何年に訪日するという、その年以外には決まっていません。

当然のことで、また皆さまもご存じでしょうが、これまでのミハイル・セルゲビッチ・ゴルバチョフの外国訪問は大変に内容のあるもの、含蓄のあるもの、そして実りあるものでした。最高レベルの首脳の外訪訪問は、ただ2国関係にのみ関連して行われるものでは

ありません。わが元首の訪日は、ほかの国を訪問する場合もそうでありますけれども、十分に周到に準備されたものでなければなりません。双方は、この訪日に対して、完全なる責任を持って準備に当たるものと、私は思っています。私たちはよき隣国であり隣人であります。しかしながら、今以上により良き隣人、隣国である必要があります。それがわが外交政策の優先課題の1つです。日本側もそう考えているであろう、というふうに期待したいものであります。

2番目の質問ですが、ソビエト連邦は、このような訪問に関して、いかなる慣習が存在し、いかなるルーツがあるかということをよく承知しています。

韭沢嘉雄（日経OB） 最近の東ドイツはじめ東欧諸国のなだれ現象のような民主化の動きを、どのようにご覧になっているか。非常にテンポが速すぎると思っているか、いや、あれでいいと思っているか。それから東西ドイツの統一という動きに対しては、ソ連は軍隊を出してでも、これを阻止するのでしょうか。それともただ眺めているのでしょうか。

ヤコブレフ 東ヨーロッパで現在進行中のプロセスは、正常であり、また健全なものであると考えます。なぜ健全かといえば、まさにポジティブな民主的なプロセスが進行しているからです。このようなプロセスはだれにも脅威を与えません。このようなプロセスは西でも東でもそうですが、今後民主化を必要とする国以外には脅威を与えません。私は、このようなプロセスは、全世界の民主化に対するインパクトである、と考えております。

ただ、1つだけ関連して付け加えたいことがあります。私は個人的な驚きを感じているわけですが、ここでもそうですし、よそでもそうですけれども、一部の西側のコメンテーターたちは、このプロセスをあたかも社会主義の破綻である、あるいはソ連の政策の破綻である、というような見方をとっている点です。これは変な考え方、あるいは古い考え方と言えます。冷戦において勝利が可能である、というようなことを考える発想と同じです。もし、私たちが冷戦に終止符を打とうとしているのであれば、その考え方も、またそのア

ブローチも新しくあらねばなりません。この民主化運動というものの、これはまさに理性の勝利であります。

社会主義の破綻ということについて申しあげるなら、これはまさに一部の論者たちが頭の中でつくり上げた社会主義へのイメージが破綻してきている、というふうに言えるのではないのでしょうか。私たちは目下進行中のことを、社会主義の勝利であると考えています。

2つの自立したドイツ国家の統一という質問は、これは極めて仮説的な問題提起であります。仮説的な質問に対しては、お答えをすることは避けておきたいと思います。ご出席の皆さまの中に、このような仮説的な質問に答えることのできるような、そういう度胸のある方がいらっしゃるとすれば、その方の意見を拝聴したいと思います。

では、軍隊を使うかどうかという点ですが——質問された方の顔をつぶさないために、いま言葉を選んでる最中ですが（笑）——どのような国であれ、その国が軍事力を用いるということ自体が、すでに今日ではアナクロニズム、時代錯誤であります。すでに1985年にミハイル・セルゲビッチ・ゴルバチョフは「自由な社会的選択」という考え方を提唱しています。私たちは断固その政策を堅持していくつもりです。その際に私たちは、すべての国家が同じように理性を発揮するものであると期待しています。これは大変に重要な問題です。私たちすべてが、こぞって理性を発揮すべき時代であります。

今日の時点は次のように言えます。自由で民主的な全ヨーロッパ的な家を築くかどうか。しかし、もしだれかがそのプロセスに対して干渉するならば、またしても冷戦に後戻りしてしまう。そのような地点に立っているわけです。もし干渉が生じたならば、それは全人類的な破綻になります。

フィールド（フジテレビ） アメリカの女性下院議員の1人が最近ブッシュ大統領に送った書簡を公開しています。内容は、12月2、3日に行われる米ソサミットで、ブッシュ大統領はヨーロッパ駐留の米ソ両国の軍隊の全面的撤退を提案すべきだ、というものです。そうなった場合、ソ連としてはどのように対

応するのでしょうか。仮説的な話になるかもしれませんが、もしもひとつお答えいただきたいと思います。

ヤコブレフ これは決してあまり仮説的な質問ではありません。（笑）皆さまもご存じでしょうが、私たちは幾度となくすべての軍事ブロックの解消を提案してきております。その中にはNATOもワルシャワ条約機構も入っています。そしてまた、外国に駐留するすべての軍隊の撤退の実施を、私たちは提唱しています。もし、そのような話し合いがマルタ島で行われるとすれば、それは決して初めて始まった話し合いではないということです。あなたの国の下院議員が、そのような趣旨の手紙を大統領に送ったということであれば、まさにそのアドレスは正しかったということができるでしょう。

マッジ（イタリア通信） ペレストロイカは世界的な意味を持つとおっしゃったんですが、とくに朝鮮半島についてお聞きしたい。ソ連は将来韓国と外交関係を樹立するのか。韓国の国連加盟について同意するのか。北朝鮮に対して民主化と解放を求めていくのか。

ヤコブレフ 最後の質問のほうから申しあげます。ソビエト連邦は、世界のいかなる国に対しても民主化を要求したり、あるいは逆に全体主義化を要求する立場には立っておりません。それはわがソ連の問題ではありません。その問題は、その国に住んでいる国民の問題です。ましてや、民主主義の概念についていえば、人類はいまだかつて統一見解を打ち出し得ておりません。ちょっと話がそれますが、かつてチャーチルはこう言いました。「人類が考え出した1番いまわしいものは民主主義である。ただ、それ以上にいいものも人類は考え出してはいない」と。

最初の質問ですけれども、朝鮮民主主義人民共和国とイタリアが外交関係を結ぶかどうか、ちょっと様子を見てみましょう。一般的には朝鮮半島の2つの部分が歩み寄り、接近してほしい、というのが私たちの希望です。それが連邦の形をとろうが、連合の形をとろうが、あるいはそのほかの形をとろうがそれはすべて当該国の問題です。

ただ、この朝鮮半島における唯一の問題は、外国の軍隊のプレゼンスであります。これはわが国の安全にも抵触するものです。そのほかのすべての問題は、朝鮮あるいは韓国の人々の問題です。

鈴木（NHKOB） 私たちの理解では、ヤコブレフさんは、フルシチョフ時代、若き党幹部の中で、最もリベラルで最もオープンで最も進歩的な人だった、というふうに認識しています。35、6歳の時に、フルシチョフ指導部から選ばれて、コロンビア大学へ送られてアメリカをしっかりと見てこられた。

またブレジネフ時代に、やや右傾化してきたロシア愛国主義、あるいはロシア右翼反動みたいな分子が出てきた時に、これを宣伝部第一次長として率先して批判したためにカナダへ飛ばされた。

10年間、カナダにおられた時に、トップになる直前のゴルバチョフさんが、農業担当の政治局員として農業代表団を率いてきた。そこで依然としてリベラルでオープンな信念を持ち続けていたヤコブレフさんと、若きゴルバチョフさんとが話し合い、肝胆相照らす仲になって、現在の主演俳優ゴルバチョフ、チーフデザイナー・ヤコブレフという組み合わせができていくというふうに理解するのですが、その理解でよろしいでしょうか。

ヤコブレフ 私の履歴について論争に入りたいとは思いません。ただ、1つだけ修正しておきたい。私がコロンビア大学に留学したことに関しては、フルシチョフは全然知らなかったことです。生涯においてフルシチョフに会ったのは、私、1度きりです。

カナダへの例の訪問は、大変重要な問題であります。ただ、ここでも1つだけ修正しておきたい。確かに私は、以前も今も、そして将来においても、あらゆる類のナショナリズムに対しては反対です。ナショナリズムというものは、あらゆる民族、あらゆる国家の毒である、私は考えています。このナショナリズムというものは、それに制約が加えられない限りは、いつかはファナティズム、そして暴力へとつながっていくものです。排外主義はナショナリズムの1つの表れです。ナショナリズムには排外主義的な要素があるわ

けで、それが具体的に表れるのが、例えば反ユダヤ主義、あるいはその他の民族に対しての排外主義になって表れますし、また国内でも同じようなことが起こるわけです。しかし、私が当時カナダに行かされたのは、こうしたことと関係があるとは思いません。

3つ目の修正です。ゴルバチョフ書記長と私が知り合いになったのは、カナダ以前の時点です。皆さまのために少しだけ小さな秘密を披露しますが、わが国でいま進行中のペレストロイカ政策の主任デザイナー、つまり、ゴルバチョフの政策の主任デザイナーはゴルバチョフです。私たちは自らの能力と可能性の枠内で、彼を助けているわけです。私は、わが国で進行中の様々なプロセス、そしてペレストロイカの一貫した支持者である、と自ら確信しております。

これは、わが国における大変に大きな事業です。わが国民の運命にかかわる事業です。各人1人ひとりの運命にかかわるものであります。

家城啓一郎（NHKOB） 多くの同僚諸君は、ヤコブレフさんのご希望に沿って、とうとう第一の質問をしないままに礼儀正しくやってきました。しかし、もしその質問が出なかったとするならば、日本の国民にとりまして、当クラブの存在が問われると思いますので、私は、1つの提案を含めて申しあげます。どんなことがあっても、ヤコブレフさんはお答えにならないのでしょうか。

ヤコブレフ いや、私は、「すぐに2番目の質問から始めても結構です」という言い方をしたにすぎません。（爆笑）質問してもかまいません。

家城啓一郎 どうもありがとうございます。

ヤコブレフ 質問されなくても、いますぐに答えましょうか？（笑）

家城啓一郎 “第3の方法”という意味ありげなことをおっしゃいましたが、いま、お尋ねしても、多分、その内容についてはお話にならないと思います。

そこで、私は、提案と言ってもいいんですけども、かつてアメリカと日本との間では沖縄につきまして、潜在主権を日本に認める、というところからスタートしました。そこで、いまヤコブレフさんに、北方領土についての日本の潜在主権を認めるというような考えについて、どのようにお考えになるのかをうかがいたいと思います。これは同時にまた、私の提案でもあります。

ヤコブレフ この問題に関する日本側の立場は承知しています。もう45年にもなりますでしょうか、この間、日本人は、この問題に関する私たちの立場をよく知ることができたと思います。その期間は長くて、また複雑でありました。いま両国間では、外務省レベルでの平和条約問題に関する作業委員会が活動しております。いまだにこの両大国の間に平和条約が締結されていないという状態は不正常であります。異常であると言えます。しかし、おかげさまで戦争はないし、また戦争はありえないであります。しかし、皆さま方は、私たちの立場に同意していない。ソビエト側も、日本側の立場に同意しない。

両国の外務省レベルでの平和条約問題に関する委員会での建設的な対話、これが第3の道であります。まさにこの対話というものが、私たちがすでに5年前に提案したごとく、現代の条件において、諸問題を解決するための基本的な手段です。私たちがアメリカ側といかなる複雑な交渉を行っているかは、皆さまご覧の通りであります。あるいはヨーロッパ諸国と行っている交渉、対話もそうです。ゴルバチョフ書記長の「ウラジオストク演説」「クラスノヤルスク演説」は、大変に興味深い提案を含んだものである、と私は思います。

中国との対話も歴史的な成果をもたらしました。今日、中国とは国境における軍事的な問題などで、建設的な対話が行われています。このようなグローバルな対話の結果として、モンゴル駐留の軍隊の4分の3が撤退することになりました。この地域からは中短距離ミサイル（INF）が撤廃されました。この地域での状態はより平穏になっています。

これですべてが終わりではありません。私たちはまだ前へ進まなければなりません。ですから、一緒に前に進もうではありませんか。

拍手を一緒に打ちたいものです。世界では、とても良好なプロセスが進行中でありますから、みんながそれに加わるべきであると思います。ですから、日本とも、私たちは善隣的な、相互尊重的な精神の有益な対話を求めているわけです。この対話は、経済、政治、文化、それから人道的な分野などを促進するものであるべきであり、それを阻害するものであってはならないと思います。双方の立場を尊重しつつ、またそれぞれの国における世論の動向を尊重しつつ、この対話を進めていかなければならないと思います。

私の言葉の中に隠された意図を探そうとしないでください。顕微鏡で私の発言をのぞく必要はありません。両国間の関係を深め、拡大していこうではありませんか。そうすれば、相互理解も信頼もより強固なものになるでしょう。相互の尊重も増すことになるでしょう。そうすると、すべての問題は極々簡単に見えてくるでしょう。これが第3の方法です。

第3の方法については答えなくてもいい、というふうにおっしゃっていただきましたが、こうやって私はお答えをいたしました。どうも皆さまご清聴ありがとうございました。

（通訳・徳永晴美 文責・編集部）

アレクサンドル・ニコラエビッチ・ヤコブレフ氏略歴

1923年生まれ。ロシア人。ヤロスラブリ教育大学卒。歴史学博士。44年入党後、65年党中央委員会宣伝部第一次長、73年駐カナダ大使、83年世界経済国際関係研究所所長、85年党中央委員会宣伝部長などを歴任。現在、党政治局員兼書記、党外交政策委員会議長、人民代議員大会代議員。

2005年10月18日 81歳で死去